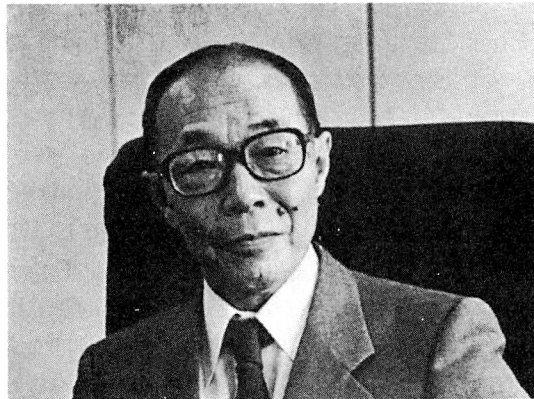


追悼 亀井一綱先生

関東学院大学 井上枝一郎



本学会名誉会員の亀井一綱先生は、この春、その86年の生涯を閉じられました。ここに謹んでご冥福をお祈りする次第です。

先生は、昭和20年に東京帝国大学文学部心理学科を卒業なされ、直ぐに財団法人労働科学研究所に入所されました。しかし、戦後の混乱期でもあり、労働科学の研究継続もままならぬままに、昭和26年には社団法人日本新聞協会に移られました。当協会では新聞記者の適性と労働実態という観点から多くの調査に取り組み、数編の論文を著されています。その後、昭和36年には警察庁科学警察研究所心理研究室長を歴任された後、昭和42年に関東学院大学文学部教授に就任され、以後定年を迎えられるまで当学で教鞭をとられています。先生は科学警察研究所時代には、捜査官の適性と警察組織、警察活動と生活行動、等々の論文を出され、また大学では教鞭を執る傍ら、フィールド調査にも積極的に出向き、福祉労働者の労働実態と適性、昭和史—労働者の労働実態—、等々の論文を発表されています。先生の数多くの著作の中から、本学会との関連で挙げるとすれば、産業心理ハンドブック（本学会編、昭和38年）と当時応用心理学の領域では画期的な著作だとされた、産業心理学から見た「労働と人間」（共著、誠信書房、昭和40年）があります。

今振り返り、これら一連の著作を通して、先生が一貫して追求された研究の方向性とは、先生自身がたとえどのような職場にあっても、常にそこで働く人々の労働実態の把握とその改善への提言ではなかったかと思われます。後述しますが、先生の生い立ちとその経歴とを考えると、一体何故、先生はかくも執拗に労働者のための研究に邁進されたのか理解に苦しむところでもあります。若輩の筆者には今その心の奥底をうかがい知ることはできませんが、想像を巡らせて二つばかりの思い当たる事柄を挙げてみたいと思います。

その一つは、先生が大学を出られて直ぐに労働科学研究所に入所されたことが大きな影響を与えたのではない点です。時代は、それまでの体制が一変し、戦後民主主義の高揚期にあった時です。労働者に関する研究が一種の熱気を帯びていたことは想像に難くありません。この時代のかかる精神動向に、若き研究者として世に出たばかりの先生の若い心が一瞬の内に捉えられてしまったのであろうと考えるのは思い過ごしでしょうか。いわゆるインプリンティング説です。

さて、二つ目の原因論を語るには、少々、先生の生い立ちに触れなければなりません。

先生は、島根県津和野の亀井伯爵家の出であり、旧華族の一員として鎌倉にて幼少を過ごされています。今思いますに、この頃の亀井少年に、良くも悪くも、当時の日本的貴族の伝統が陶冶されていったであろうことは十分に想像されるところです。その傍証として、この頃に身に付けその後の先生の生活を彩った多くの趣味の一端を挙げてみます。語学では、英語、フランス語、ロシア語、中国語を習得し、弓道、謡曲、茶道、俳句、水彩画をものにし、ビリヤード、ゴルフ、ドライブ、海外雄飛、等々、今日カルチャーと言われているあらゆる分野にそれらはわたっています。そして、そのいずれもが一流の域に達していたという、我々卑しい出自の者には想像もできない幅広い世界が展開されていました。いささか余談になりますが、筆者が先生に親交を頂いて以後、実はこれらの先生のご趣味に付き合わされ大変困惑したことが今思い出されてなりません。例えば、ロシア語とビリヤードがそれらでした。別に筆者がそれらを望んだわけでもないのに、先生の方から一方的に、「お前は田舎出の山猿だ。少し上品になりなさい」とのご託宣の下、毎週ロシア語の宿題を出され、成績が良いと神保町の学士会館でビリヤードを教えてくれるという贅沢にも苦しい修行を課されたものでした。何でロシア語などを学ばなければならないんだ、と当時は腹立たしい思いで一杯でしたが、その後思いがけずも筆者はロシア関係のプロジェクトに携わる機会を得、多少なりともこの当時覚えたロシア語が役立ったことは事実です。この点においても今冥土にいらっしゃる先生に感謝を申し上げたい思いであります。

さて、本論に戻ります。先生のかような生い立ちと生活振りと先生の研究である労働者の働き振りとの接点は一体何であったのであろうかに答えを出さなければなりません。筆者が思いますに、それは、上に述べた先生の血の中に脈打つ日本の貴族社会の教養と多種な語学習得の中で得た西欧的精神世界との融合の中で生まれてきた、いわゆるノーブレスオブライジ(noblesse oblige)の精神ではなかったらうかという解釈です。

つまり、昭和から平成の時代に在って、必ずしもかつてのような経済基盤が保証されているわけでもない華族の血を引く身にありつつも、せめてその内発的欲求の在り所として、上に立つ者の義務ではなく責務として、「労働者の生活の向上に貢献し得る何ものか」、それが先生の一貫した研究テーマであったに違いないという結論です。先生は、もしかして、その晩年、こともあろうにこの筆者に必死になってそれを教えようとしていたのかもしれませんが。しかし、いかにせん、下賤な身の筆者にはそれを体得することなどは不可能であったように今思います。

ノーブレスオブライジがそれとして成り立つのは、下の者に分け与える、という一種の慈悲でもなく、ましてや奢った心根から生じる高踏的な気分からのものであってもらないとされています。亀井先生の振る舞いは、そのような気配は微塵たりともなく、飽くまでも自然体の中から、ごく普通にに滲み出てくるものであり、飄々として我々に接するその態度こそ、西欧のナイトが醸し出していた世界に通じるものであったらうことは確信に満ちた筆者の思いです。

筆者の手元には、先生がご婦人とともにパリからイスタンブールへとオリエントエクスプレスで旅された時のお土産に頂いた黄金のキーホルダーが今も残されています。土産品であるからには、それは多分金メッキが施されたものであろうことは疑いようありませんが、先生の全人格を思い起こす時、筆者にはそれが真の黄金に見えて仕方ありません。黄金のノーブレスオブライジ、本当のオリエントエクスプレス、それこそが先生が後に続く我々に残してくれた教えの一端ではなかったらうか。そう信じたいと思います。

先生、どうか安らかに眠り下さい。「労働者の健康で快適な生活の追及」「応用心理学のますますの発展」という先生の希求された願いを実現するべく、及ばずながら邁進してまいる所存です。最後に、重ねて先生のご冥福を祈る次第です。